

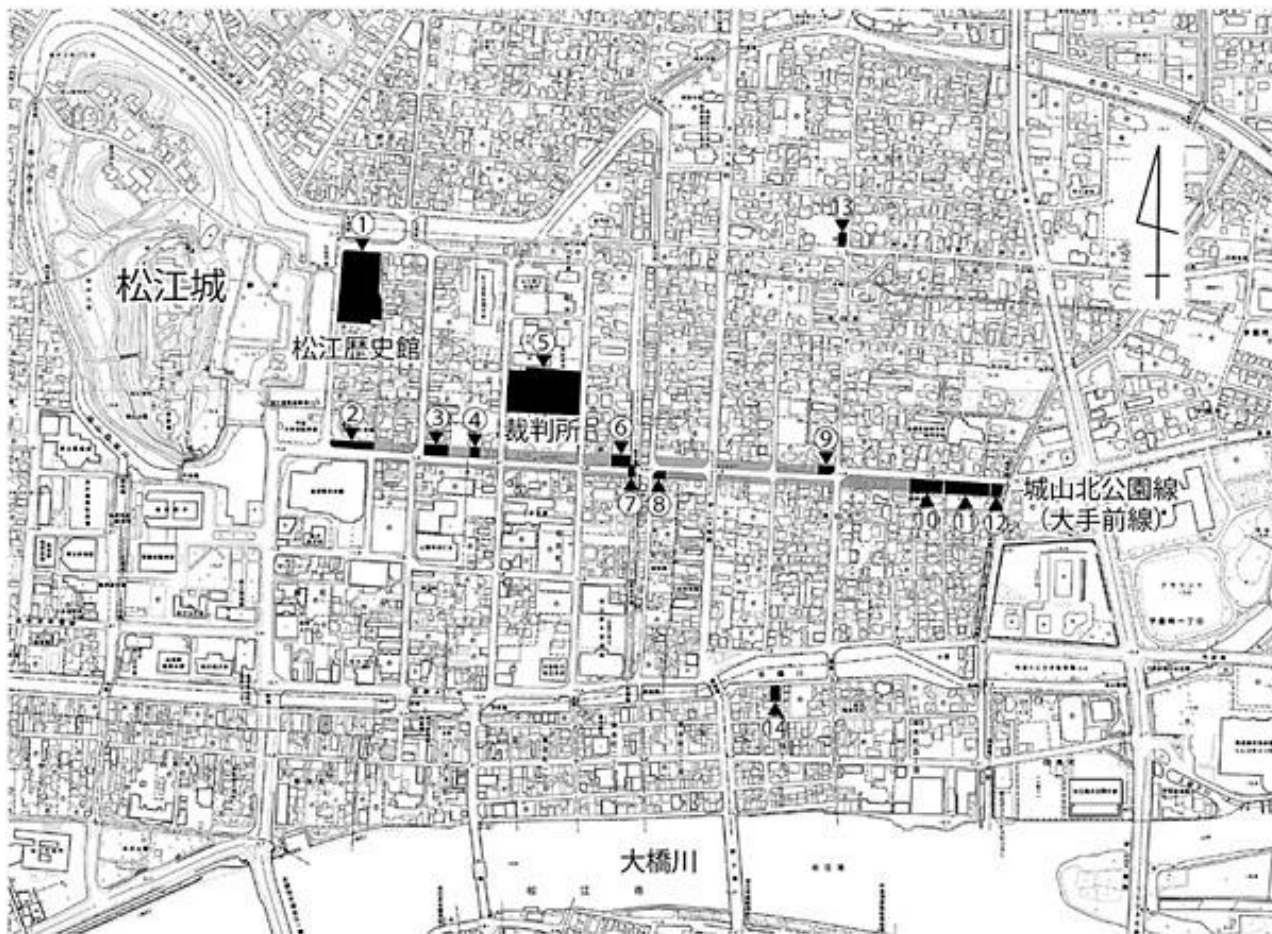
### 松江城下町遺跡の出土品に見る茶道具―堀尾期を中心として

はじめに

戦国大名尼子氏の居城・富田城（とだじょう）の城下町遺跡であった富田川河床遺跡（とだがわかしょういせき、安来市広瀬町）においては、中国産の天目茶碗や朝鮮産の蕎麦茶碗が発見され、茶文化が浸透していたことは良く知られている。一方、松江が開府された江戸時代初期については、堀尾氏が改易されたために史料が残っておらず、城下での茶の湯の実態は殆ど分かっていない。

しかし、平成18年（2006）から松江歴史館の建設や城山北公園線（大手前通り）拡幅事業に伴う城下町の発掘調査が始まり、武家地を中心に、ここ10数年、陶磁器や漆器、金属製品など大量の遺物が発見された。その中には、少なからず茶道具も含まれており、発掘調査の成果をまとめた各報告書にも記述されている。

本稿では、城下町が建設され始めた慶長12年（1607）から堀尾氏が改易された寛永10年（1633）までの出土品から、茶道具の組成や特徴を述べてみたい。



【図 1】松江城下町遺跡の発掘調査地点位置図

【表】松江城下町遺跡の主な発掘調査地点

番号	発掘調査地点
1	殿町 287・279 外 (松江歴史館)
2	殿町 191-13 外
3	殿町 343 外
4	母衣町 43-2 外
5	母衣町 68 (松江地方裁判所)
6	母衣町 180-28・189-29 外
7	母衣町 186 外
8	米子町 40-4 外
9	南田町 104-3 外
10	南田町 132 外
11	南田町 134-11 外・136-13 外
12	南田町 137-13 外
13	北田町 48-1 外
14	東本町 4-147 外

## 1. 松江城下町遺跡から出土する茶道具

茶道具の中で、残り具合がよく、出土品として多いのは陶磁器類である。器種としては、陶器の茶碗が目立つ。一方、遺物が少ないのは茶入、茶壺、建水、水指、香炉、花入である。なお、会席に使用された向付などの器も出土し、陶磁器以外にも木製品の漆碗や膳も僅かながら発見されている。

・茶碗：江戸時代初期の山陰において、出土量が多いのは肥前（佐賀県）で焼かれた唐津焼である。同じ九州でも、福岡県の上野・高取焼は少ない。唐津焼は17世紀初頭から碗、皿をはじめ、播鉢、壺、甕などの日用雑器を大量に生産し、江戸時代前半には全国に広く流通した陶器である。唐津では天目の茶碗も生産され、中には鉄釉で草花文を描くものもある。

次に多いのが、愛知県や岐阜県で焼かれた瀬戸・美濃焼である。室町時代から引き続き生産された陶器で、山陰でも中世後半から江戸時代初めまで多くの遺跡で出土している。また、黒織部の沓茶碗が堀尾期の数カ所の調査区から出土している。松江歴史館敷地からは、出土例が稀な軟質施釉の碗も発見されている。

・茶入：濃茶用の茶を入れる小さい壺で、中世には中国製品が占めていた。江戸時代には国産品が多く、松江城下町遺跡からは瀬戸・美濃、唐津、備前焼の製品が数点出土している。

・茶壺：茶壺とは、茶臼で引くまでの葉茶を保管する壺である。戦国期では、中国産の四耳壺が多いが、江戸時代には唐津や信楽焼等になる。信楽焼は戦国期から山陰でも出土しているが、器種としては壺のみであり、このことから茶壺が運搬・保管の容器に使用された可能性がある。

・建水：茶碗をゆすぐ湯を捨てる器である。松江城下町遺跡からは備前や萩のものが出土している。

・水指：釜に足す水や、茶碗、茶筌をすすぐ水を入れる器である。城下町遺跡からは唐津の鉢が出土している。

・香炉と香合：香炉は香をたく器で、香合は香を保管する蓋付のものである。香炉は戦国期には中国産の青磁が多かったが、江戸時代には瀬戸・美濃や伊万里焼等の国産品にかわる。堀尾期のものは今のところ認められないが、松平期になると伊万里の製品が出土している。香合としては、志野が1点ある。

・花入：床の間等に飾る花器で、萩、上野・高取が認められる。

・風炉：夏期に、炭火で釜を沸かす容器である。松江城下町遺跡では、瓦質の風炉が1点出土している。報告例が少ないので、破片が瓦質の火鉢としてカウントされた可能性もある。



【図2】松江城下町遺跡出土の茶道具（文献7）

## 2. 調査地区別にみる茶道具

前項で紹介した茶道具を、以下、松江城下町遺跡の調査区別に出土品を紹介してみたい。

### (1) 松江歴史館敷地（北屋敷・南屋敷：殿町）

内堀に架かる北惣門橋の東側一帯は、江戸初期から幕末まで家老の屋敷地となっていた。堀尾期には、重臣の堀尾民部の屋敷で、元和6年（1620）に当主が亡くなると、その子の采女（4000石取）が継ぎ、南に隣接する屋敷は弟の堀尾右近（500石取）の屋敷地となる。発掘調査では便宜上、采女の屋敷を北屋敷、右近の屋敷を南屋敷と呼んでいる。報告書から抽出した茶道具は次のとおりである。

#### 北屋敷

（茶碗）瀬戸・美濃、唐津（天目が多い）・唐津の沓茶碗

（茶入）唐津の肩衝型小壺

（水差）唐津の鉢

（香合）志野（蓋のみ出土）

（向付）志野の変形皿

#### 南屋敷

（茶碗）唐津、黒織部沓茶碗・腰折碗、軟質施釉陶器の碗

（向付）志野の胴紐形碗

(香炉か、火入) 唐津の筒形壺

(水差) 唐津の寸胴形鉢

## (2) 裁判所西門付近(武家地:母衣町〔ほろまち〕)

松江裁判所の周囲は、江戸時代には中級武士の屋敷が並ぶ場所であった。大手前通りの拡幅部分は堀尾期の城下町絵図では300石取の落合半左衛門尉の屋敷と考えられる。堀尾期の遺構があったのは、表門から入った庭先で、廃棄土坑(SK24)と石積施設(SK26)が検出されており、中から茶道具も出土している。調査担当者は、廃棄土坑の遺物から「堀尾氏の改易により、急きょ退出を余儀なくされた落合家が、急いで始末したとの印象が強い。」と推定している(文献6)。

### 廃棄土坑

(茶碗) 黒織部の碗

(向付) 志野の皿

(木製品) 膳

### 石積施設

(茶碗) 唐津

(茶壺) 信楽

### (3) 米子川西岸（武家地：母衣町）

米子川（外堀）西岸で、米子橋付近にあたる。「堀尾期城下町絵図」では、馬廻り 1000 石取の今村右馬之丞の屋敷である。城下町初期の造成土上面の礫敷（SX01）から出た一括の遺物中に茶道具が混じる。

#### 第 4 遺構面

（茶碗）唐津の沓茶碗

（茶入）瀬戸・美濃の肩衝形小壺

### (4) 米子町城山北公園線北側（町家：母衣町）

市道米子町大橋川線と国道 431 号に挟まれた大手前通りの北側にあたり、「堀尾期城下町絵図」と京極期の「寛永年間松江城家敷町之図」（丸亀市立資料館蔵）を見ると、短冊型敷地の町屋が並んでいる。茶道具はマンホール設置に伴う立会調査（MJR78）で出土したもので、対象面積は限られていたが、町屋での様子を知るうえで貴重な遺物となっている。

#### 調査地点（MJR78）

（茶碗）瀬戸・美濃、唐津

（建水）備前の鉢

## (5) 城下町東端（空地：南田町）

調査区は城下町の東端に位置する。「堀尾期城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）では、種村弥太夫の屋敷東側一帯にあたり、武家の名前が書かれていない空白地となっていた。時代が下って松平期に入ると、家老筆頭の大橋家の屋敷地内に組み込まれ、8軒の与力屋敷になる。堀尾期には畠跡が検出されており、そこからの出土品にも茶道具が混じる。出土した中で注目されるのが白磁碗で、松江城下で唯一の朝鮮産磁器である。

なお、時期差はあるものの、戦国期の富田川河床遺跡では、斗々茶碗や蕎麦茶碗をはじめ、粗製の皿や徳利などの朝鮮王朝陶磁が発見されている（文献 1、3）。

### 畠跡

（茶碗）朝鮮産白磁、唐津の天目

### 土坑 11

（茶碗）唐津の天目

（建水か）備前の鉢

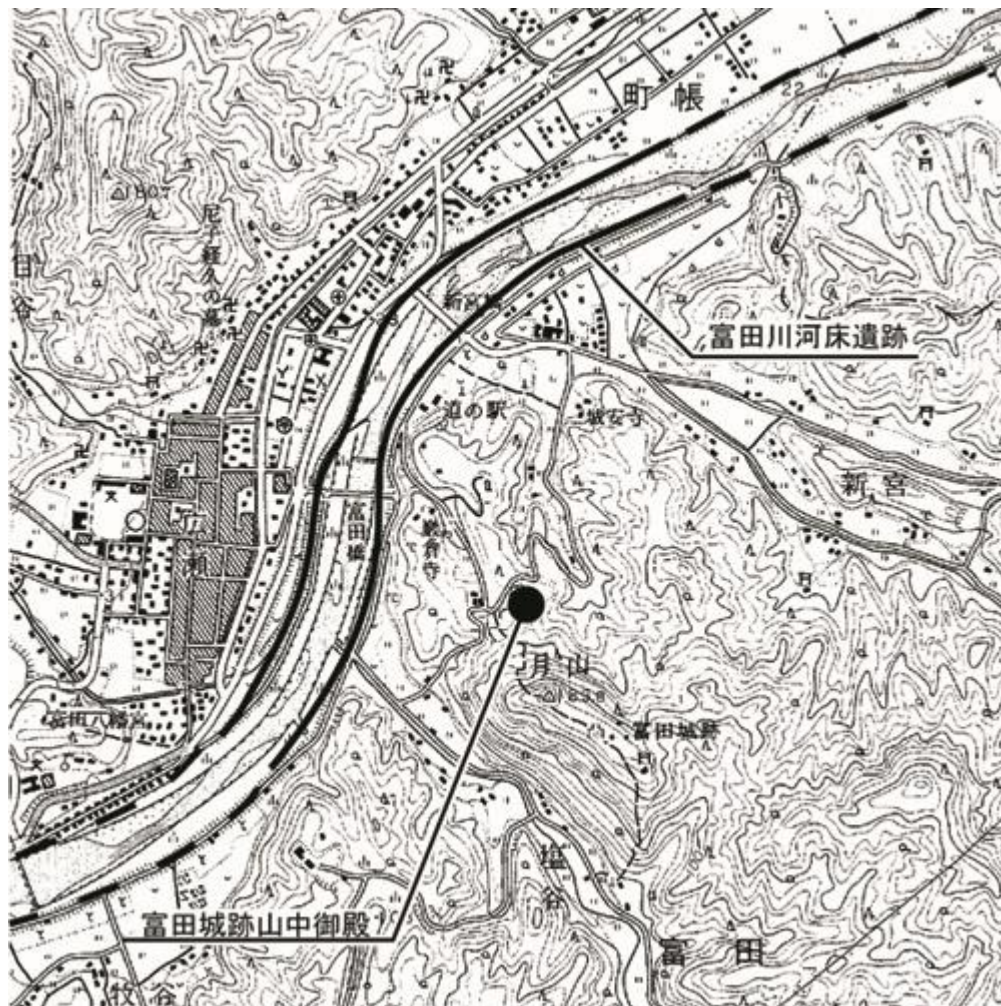
### 遺構外

（茶碗）唐津

（向付）織部の鉢か



### 3. 堀尾期における茶道具の組成や特徴



【図3】富田城跡と富田川河床遺跡の位置図（文献5）

以上のとおり、遺物としての茶道具類は、松江歴史館敷地をはじめ大手前通りの発掘調査において、各調査区から少なからず出土している。堀尾期における殿町の重臣や母衣町の中級家臣の屋敷でも茶道具は揃っており、日頃より茶の湯を嗜んでいたことが窺える。

なお、織部と志野に限って見た場合、岡山市の岡山城内の重臣屋敷からは多く陶器が出土している。また、鳥取県の米子城下でも内堀に面した重臣屋敷跡に出土数が多い。一方、山口県の萩城下では外堀に面する町屋でも多くの織部と志野がまとまって発見され、さらに石見銀山遺跡（大田市大森町）では鉢山町からも点々と出土している。茶道具の所持には、身分だけではなく、財力も影響していると考えられる（文献5）。

茶碗については、前記のように新しく流通してきた肥前の唐津が大部分を占め、瀬戸・美濃が僅かに混じる程度である。また、唐津や黒織部の沓茶碗も数点確認されている。しかし、中国産や朝鮮産は殆ど認められない（文献4、報告書7）。同様なのは茶入や茶壺で、中国産のものは今のところ出土例がない。

前代の 16 世紀中頃の富田川河床遺跡においては、茶道具は中国産の陶磁器が多く出土しており、国産品については瀬戸・美濃の天目や信楽の壺などに限られる（文献 1、3）。このように、茶道具に唐物や高麗物と云われる舶来の茶碗が少なからず混じるのが戦国末期から安土桃山時代の特徴とされるが、江戸時代に入るとこうした舶来品志向に変化が生じ、松江城下町遺跡の出土品を見ると、国産陶器が茶道具の殆んどを占めている。

なお、松江城下町遺跡では建水と水指の報告例は少ない。これは、建水や水指の破片が茶道具としてではなく鉢としてカウントされ、報告書に掲載されなかった可能性がある。また、実際に木製品の曲物の水指が多く使用されたとも考えられる。

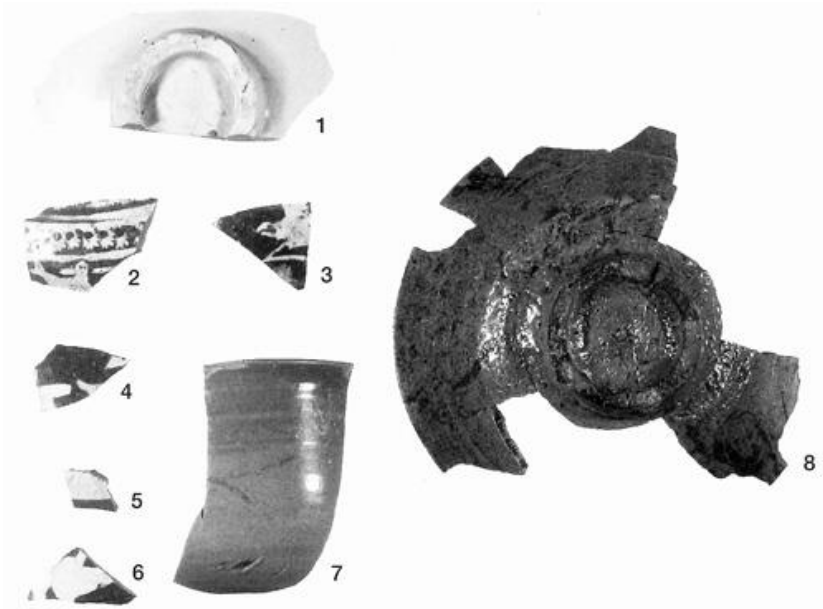
#### 戦国末期の富田川河床遺跡（SK015）出土の茶道具組成

（茶碗）中国（天目 1）、朝鮮（蕎麦 3）、瀬戸・美濃（天目 1、灰釉平碗 1）

（茶入）中国（褐釉小壺 1）

（水差）信楽（鬼桶 1）

（茶壺）中国（褐釉三耳壺 1、四耳壺 1）、タイ（四耳壺 1）、信楽（壺 1）



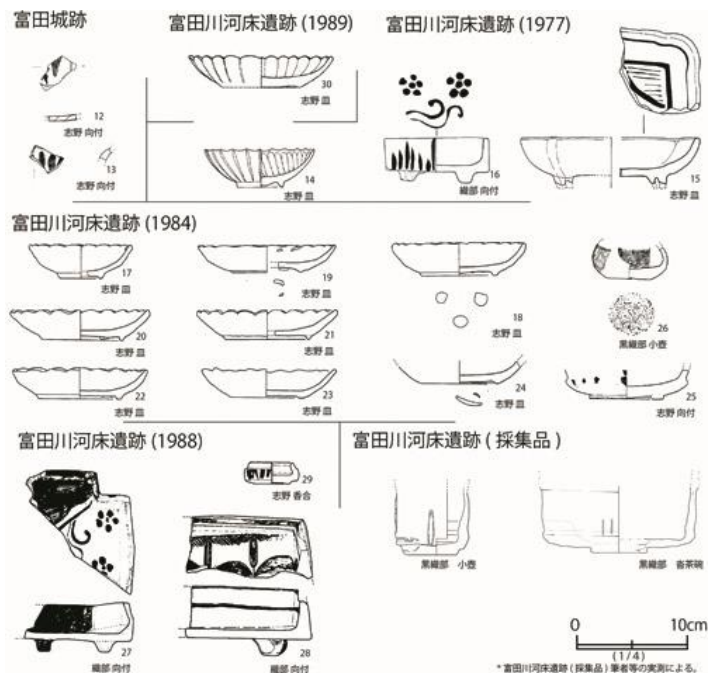
【図 4】 富田川河床遺跡第 6 次調査出土の朝鮮王朝陶磁器（文献 3）

（1.白磁皿、2～6.粉青沙器〔象眼〕徳利、7.白磁碗、8.粉青沙器蕎麦茶碗）

おわりに

最後に、茶の湯の広がりや茶道具の組成を簡単に記しておわりとする。

松江城下でも、他地域の城下町と同様に、茶道具や会席に使用される器が豊富に発見されている。それは家臣団の中でも、禄の高い重臣だけではなく、中級武士も茶の湯を嗜んでいたことを物語っている。さらに、発掘例が少ない町屋でも、米子町の一角で茶道具が出土しており、裕福な町人も茶道具を所持していたことが知れた。



【図5】富田川河床遺跡出土の志野・織部（文献5）

江戸時代の初めの茶道具を見ると、殆んど日本産の陶磁器で占められていることも分かってきた。特に、茶碗は瀬戸・美濃がある程度混じるものの、大部分は唐津に代表される肥前系陶器が占め、その一方、前代の16世紀の中国産や朝鮮産のものが姿を消したことも特徴である。また、会席に使用される志野、織部も各地区の発掘調査で点々と出土しており、茶の湯の広がりや茶道具の流行が認められる。

課題についても少し記述しておく。本稿で取りあげた茶道具の事例は、城下町全体からするとごく一部の様子に過ぎない。今後の発掘調査の成果、とりわけ中世以来の港町であった末次や白湊の町屋の出土品の状況が分かれば、堀尾期の茶文化がより重層的に把握できるものと考えられる。さらに、他の城下町の出土品との比較も重要な作業となろう。

（松江城調査研究室／西尾克己／令和3年1月18日記）

### 〈関連文献・図録〉

1. 村上勇「島根県富田城関連遺跡群出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』7、日本貿易陶磁研究会 1987
2. 『日本貿易陶磁研究会中国大会資料集-中世後期における貿易陶磁器の様相-』日本貿易研究会 2002
3. 西尾克己・守岡正司・細田美樹「富田城跡と富田川河床遺跡出土の朝鮮王朝陶磁」『松江考古』9、松江考古学談話会 2001、西尾克己・守岡正司「富田川河床遺跡における戦国期の遺構と出土陶磁」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター2013
4. 『第15回山陰中世土器検討会資料-山陰における高麗・朝鮮陶磁-』山陰中世土器検討会 2017

5. 西尾克己・樋口英行「中国地域の日本海・瀬戸内海交易路にみる志野・織部」『関西近世考古学研究-考古学から見た安土・桃山の茶の湯文化-』14、関西近世考古学研究会 2006
6. 石井悠『山陰文化ライブラリー4-松江城と城下町の謎にせまる-』ハーベスト出版 2013
7. 『江戸時代へ行こう！-松江城下町ものがたり-』松江歴史館 2011
8. 『共同企画特別展松江城と江戸城』松江城歴史的価値発信事業実行委員会・千代田区 2017
9. 『特別展：松江城大解剖-城郭そして城下町-』松江歴史館 2020

#### 〈発掘調査報告書〉

1. 『富田川河床遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会 1983
2. 『松江城下町遺跡（殿町 287 番地）・（殿町 279 番地外）発掘調査報告書 - 松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書-』島根県松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2011
3. 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書』1、島根県松江市教育委員会・財団法人松江市文化振興財団 2012
4. 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書』3、島根県松江市教育委員会・公益財団法人スポーツ振興財団 2014
5. 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書』4、島根県松江市教育委員会・公益財団法人スポーツ振興財団 2014
6. 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書』8、島根県松江市教育委員会・公益財団法人スポーツ・文化振興財団 2018